

スイク教聖典編纂者 グル＝アルジャンの生涯 —歴史と伝承のなかで—

橋 本 泰 元

はじめに

前稿（『東洋学論叢』38号）がスイク教研究のためのほとんどの資料を概観したのであるのに対して、本稿は1604年に根本聖典『アーディ・グラント』（Ādi Granth 以下AGと略記）を編纂した第5代グル＝アルジャン（Guru Arjan）の生涯の素描に努め、その生涯がAGの編纂の状況に、あるいはAGの内容に、どのように作用しているかを検証しようとするものである。なおAGはどの版でも構成は同一であり、また読みもほぼ確定されていることは前稿に述べた通りである。

歴史におけるグル＝アルジャン

グル＝アルジャンは、スイク（Sikh）教徒の家庭に生まれた最初のグルだった。彼は、生まれたときからグルたちの教えに十分親しみ、「神の示現」の教えを仕込まれていた¹。彼のいわば歴史と伝承における生涯は、次の二つの部分に分けることができよう。第1は、伝記の詳細の再構成に関わることである。これまでの資料を繋ぎ合わせれば、彼の生涯とムガル権力による拘禁中の死に至るまでの出来事をかなり正確な描写ができる。彼のグル在位中の期間は、パント（panth 宗団）内におけ

¹ Ādi Granth（以下AGと略記）AG, p. 1407, *Savayye Mahale Pañjvem*, “tai janamata guramati brahamu pacchānio”. また、W. Owen Cole, *Sikhism and its Indian Context 1469-1708*, London: Darton, Longman & Todd, 1984を参照。

る機構の広汎な発展によって特徴付けられ、彼の死がスィク教団史における転換点となった。第2は、信仰と伝説におけるアルジャンの生涯の再構築に関わることである。最初に、グル＝アルジャンの神話がすでに生前に作られはじめたことを銘記しておくほうがよいだろう。スィクの吟遊詩人たちは、彼がスィク教団の玉座に就いたとき讃歌を歌っていたのである。幸いにも、これらの讃歌はAGに収録されており、グル＝アルジャンの同時代の民衆が描いた彼のイメージを明らかにしている。この伝統的な認識が現代にまで続いており、スィクの未来の世代に影響を与え続けるだろう。とても興味深いことは、吟遊詩人たちの讃歌が毎日の儀礼で毎朝唱えられていて、その人たちは、『グルー・グラント・サーヒブ』（以下GSと略記）がアムリットサル（Amṛtsar）のダルバル・サーヒブ（Darbār Sāhib）に初めて奉安された時に吟遊詩人であった末裔の家系であることである。

さて、グル＝アルジャンは、サンヴァット暦1620年、ヴァイサーク月、黒分7日（*vaisākh vadī 7 sambat 1620*）、すなわち1563年4月15日に生まれたことになっている²。この日付は学者の多数意見に基づいており、今日では、グルの誕生日として祝われている。彼の父は、グル＝ラームダース（Rāmdās）で、当時ゴーインドワール（Goindvāl）の町に住むソーディー・カトリー（Soḍhī khatrī）のジャーティ出身で、母は、第3代のグル＝アマールダース（Amardās）の娘のビービー＝バーニー（Bībī Bhānī）であった。アルジャンには二人の長兄プリティー・チャンド（Prithī Cand）とマハーン・デーヴ（Mahān Dev）がいた。パンジャープ文化では、末弟が家族の寵愛を受けることが多く、母方の祖父グル＝アマールダースが彼を祝福してアルジャンと命名したのは当然であった。

一個人のアイデンティティは、つねに、人々との談論、同時代のイデオロギー、そして体制の慣行の産物である。グル＝アルジャンの生涯をより体系的に研究するには、次のように時代的な特徴によって三区分するほうが便利である。すなわち（1）ゴーインドワールにおけるはじめの11年間、（2）ラームダースプル（Rāmdāspur）とラーホール（Lāhaur）

² Pashaura Singh, *Life and Work of Guru Arjan*, New Delhi : Oxford University Press, 2006, p.65, note 3.を参照。

(14)

における次の3年間、そして(3)グル在位の最後の25年間である。

ゴーインドワールにおける11年間

アルジャンは、両親とともに母方の祖父グル＝アマルダースの監督下で幼年時代を過ごした。第3代グルは、初祖グル＝ナーナク (Nānak) の系統の精神的指導者の立場にいたので、スィク宗団内で権力を保っていた。

時のグルの家族の孫としてアルジャンは、当時得られる可能な限りの保護を受けていたであろうことは驚きではない。アルジャンが幼年時代に重病を患ったという記録はない。アルジャンは、子供として友人たちとゲームに打ち興じていたであろう。しかし、彼は、グル＝アマルダース時代に、スィク宗団の中心地であったゴーインドワールにおける宗教集會に日常的に接していた。スィク教の慈愛の教え、謙虚な姿勢、奉仕の精神、誠実性などグルの教え (gurmat) を修得するには、そこは理想的な場所であった。伝承によれば、アルジャンは、ゴーインドワールで初期のスィクであったバーバー＝ブッダー (Bābā Buddhā) にグルムキー (Gurmukhī) 文字を、街のパンディットのケーソー (Keso < Skt, Keśava) とゴーパール (Gopāl < Skt. Gopāla) にサンスクリット語を学んだ。バーイー＝グルダース (Bhāi Gurdās)、バーイー＝サーヴァンマル (Sāvanmal) やバツラー (Bhallā) 一族³の子どもたちが、彼の同窓生であった⁴。彼らは、聖句の諳誦に参加していた。その聖句は、グル＝ナーナク時代以来、日常勤行として個人として、あるいは集會で唱えられる慣行であった。当然ながら、アルジャンは帰依の讃歌詠唱のために撰集されたグル・バーニー (gurubānī「グルのことば」) とともに、儀礼用の讃歌も憶えた。

カトリーとしてのアルジャンが、土地のムスリムの学校 (*maktab*)

³ カトリー内の一ジャーティで、アマルダースとグルダースの出身ジャーティである。W.H. McLeod, *Historical Dictionary of Sikhism*, London: The Scarecrow Press, 1995, p.53.

⁴ Randhir Singh, "Guru Arjan Ank," *Punjabi Duniya*, June-July 1953, p.8. Annotated by Pashuara Singh: 2006, p. 98, note 5.

でペルシア語を学び上達したことは多いにあり得ることである。AG所収の「ティラング」(*Tilāṅga*)と「マールー」(*Mārū*)のなかの讃歌は、とくに彼のペルシア語やイスラーム文化の教育の背景を指示している⁵。さらに彼は、教育を受けたあと、グル＝アマルダースの指揮の下で編纂されていたゴーインドワール写本 (*Goindvāl Pothi*)の事業を近くから見ていたに違いない。第1代から第3代までのグルとサント(宗教詩人)たちのさまざまな讃歌をラーガ (*rāga*)に合わせてどのように編纂するか、その過程を詳細に観察したであろう。ゴーインドワールは、デリーからラーホールへの帝国の幹線道路上に位置したため、ムガル帝国時代にはかなり重要な街であった。ときおり、アルジャンはこのスイクの宮殿への訪問者を観ていたであろう。とくに、皇帝アクバルがグル＝アマルダースを訪問した「出来事」は、8歳のアルジャンの感受性豊かな心に深い印象を残した。

パンジャブ文化では、子供は母方のおじから格別な愛情を受ける。アマルダースの息子モーハン (*Mohan*)とモーホリー (*Mohrī*)が⁶、アルジャンと親密な関係を結ぼうとしたことは当然である。しかし、この親密な関係は、グル＝アマルダースが二人の実子を差し置いて敬虔な義理の息子ラームダースに遺贈した時に緊張関係へと変わった。モーホリーは父親のこの決定を受け入れグル＝ラームダースに帰順したが、モーハンはゴーインドワールに自分の権力の座を建てた。モーハンは、事実、長子相続の慣習法に訴えて第4代グルに挑んだ。11歳の時、アルジャンはこの家庭内紛を目撃しグル位の継承が問題多いことを知った。この出来事が彼の思い出に深い傷痕を残したであろう。

また彼は、祖父グル＝アマルダースが95歳で1574年9月1日(火)の満月の日に天寿を全うしたことを見ている⁶。そして祖父の次のような遺言を思案したに違いない。「私の死を誰も嘆くことなかれ。慣例の儀礼に頼ることなく、私を追悼してキールタン〔讃歌詠唱〕のみを行うべ

⁵ Mahalā 5, *Tilāṅga* 1-5, AG, pp.723-4. *Mārū Sohile* 12, AG, pp. 1083-4.

⁶ *sambat 1613 vārāṅhe maha bhāḍau sūdī 15 pūrnamā kai dinī maṅgalavāra maha amrita velā Guru Amradāsa samānā*. Guru Nanak Dev University MS. 1245, folio 1245. Annotated by Pashuara Singh : 2006, p. 98, note 10.

(16)

し」⁷。

全体として、グル＝アマルダースがいたゴーインドワールで過ごした創造的な期間における経験は、アルジャンの思い出の主要な部分となり将来の彼の概念と判断力を形成するのに貢献したのである。

ラームダースプルとラーホールにおける7年間

グル＝アマルダースは、義理の息子を後継者として決めるときに、新たな精神的中心地を造営するように指示した。そこで、グル＝ラームダースは、1574年、家族とともにラームダースプルに移住し、弟子たちも随った。居住地は、初めは「グルの村」(Guru kā Cakk) として知られていたが、後にラームダースプル(「ラームダースの住居」)として知られるようになった。グル＝ラームダースは、居住地の中央に沐浴のために巨大な池の建設の事業を開始した。完成後、この池はアムリットサル(「不死の甘露の池」)と名付けられた。当初から、巡礼の中心地として役立つための聖池として目論まれた。この名称は、後に街全体の名称となった。新しい街の造営と巨大な池の開鑿は、第4代グルの相当な資金の動員力を示している。彼は、この目的のために代理人(masand)たちを指名して、慈善の供物や貴族のスイクたちからの喜捨を集めた。

ラームダースプルでの新街区建設事業という比較的新しい環境のなかで、アルジャンは両親のもとで成人に達した。彼は、土地のラバーブ演奏者たちに古典曲のラーガの訓練を受けたり、音楽家たちを訪問したりしていた。とくに当時の吟遊詩人ガヤンド(Gayand)は、グル＝ラームダースの時代にスイクたちの間で聖句の確立した念誦・聴聞・詠唱の伝統に言及している⁸。念誦と音楽が、初期のスイク宗団において聖句の伝承にとって重要な役割を担っていたのである。実際、第4代グル自身、熟達した音楽家であった。彼は、先代から受け継いできた19種類のラーガに新たに11のラーガを加えて、スイクの伝統に音楽のもう一つの次元を導入した。彼の音楽的才能は、古典的なラーガに対する息子の深

⁷ *Rāmākārī Sadu* 4-5, AG, p. 923の主旨。

⁸ *Savayye Mahale Cauthe Ke* 4, AG, p. 1403.

い関心の背景にあったことは確かである。こうして、アルジャンは音楽、聖典研究、そして詩に熟達した。実際、自身の有名な讃歌「スクマニー(福楽の宝)」(*Sukhamaṇī*)⁹における彼の評言は、法典やスムリティ文献などのヒンドゥー教聖典の比較研究の訓練を明らかに証明している¹⁰。

この時期に、アルジャンの生涯にもう一つの重要な出来事が起きた。スイクの伝承は、彼がガンガー・デーヴィー (Gaṅgā Devī) と結婚したと述べている。彼女は、現ジャーランダル (Jalandhar) 県マウ (Maū) 村のキシャン・チャンド (Kīśan Cand) の娘であり、彼が1579年、16歳の時であった¹¹。

グル＝ラームダースの在位期間の歴史的状況は、ムガル帝国のインド支配のためのアクバルによる宗教政策形成の盛んな時期であった。例えば、1575年、アクバルの多宗教への執着は、ファターヘプル・スィークリー (Fataḥpur Sikrī) における「礼拝の家」(*Ībādat -khāna*) の建設に結実した。そこでは、主要な宗教の学者たちの間で宗教間の議論が行われていた。もともとは、イスラーム法に関する争点を議論する討議が行われていた。しかし、アクバルは彼らの怨嗟と混乱に悩み、この討議をヒンドゥー教徒、グジャラートからのジャイナ教徒、ゾロアスター教徒、そしてゴアのポルトガル使節団から来たイエズス会士にも解放した。差し迫った宗教的多元主義に関する論議は、16世紀における広汎なバクティ信仰運動における宗教的表現の再生を促したのであった¹²。この討論会に、同時代の資料にいかなる言及もないので、スイク教徒がいないことを問題にしている意見がある¹³。この沈黙は、バーイー＝グルダースがヒンドゥー教徒、ムスリム、仏教徒、ジャイナ教徒、キリスト教徒そし

⁹ *Sukhamaṇī*はAGのpp. 262-96所収。

¹⁰ Mahalā 5, *Gaurī Sukhamaṇī*, Saloku 9, AG, p. 265

bahu sāstra bahu simritī pekhe saraba dhaḥholi ||

多くの法典、多くのスムリティ、すべてを見て探した。

pūjasi nāhī hari hare nānaka nāma amola ||

拝むなかれハリ・ハラを、ナーナク [曰く、真実在の] 名号 [こそ] 無比の宝なり。

¹¹ Pashuara Singh : 2006, p. 98, note 15を参照。

¹² Gurudharam Singh Khalsa, *Guru Ram Das in Sikh Tradition*, New Delhi : Harman Publishing House, 1997, p. 23-4.

てユダヤ教徒を巻き込んだ宗教討論について記していることに照らし合わせると興味深いことである¹⁴。おそらくは、パーイー＝グルダースは積極的にではなく、こうした宗教討論会に参加したのであろう。しかしながら、彼は多宗教が存在する状況下におけるスィク宗団の未来の発展のために、このような宗教討論を注意深く見守っていたに違いない。グレーワール(J.S. Grewal)が述べているように、「このように視界が広がって行くと同時に、グル＝ナーナクの教えの普遍性を支持するパーイー＝グルダースの主張は鮮烈となっていくた。グル＝ナーナクは『顕現した導師』(jahār pīr)であり、『世界の導師』(jagat-guru)である。グル＝ナーナクの教えは、所与の要件を超越しているのである」¹⁵。

グル＝ラームダースが、グル＝ナーナクを同じ文言を使って「世界の導師」と呼んで、長男のプリティー・チャンドに嫉妬を乗り越えてグルの宮廷で謙虚な奉仕者の態度をとるように忠告していることは注目すべきであろう¹⁶。アルジャンは、ゆたかな宗教的情操と鋭い知性をもっていたため常に父親の好感を勝ち得ていた。このことが、アルジャンの兄プリティー・チャンドの嫉妬心を煽っていた。伝承によれば、グル＝ラームダースのいとこサハリー・マル(Saharī Mal)がラーホールからやって来て、彼を自分の息子の結婚式に招待した。グルは、自分で結婚式に出席できないので、息子の一人を代理にしたかった。二人の兄たちが口実を言って断ったが、末弟のアルジャンは喜んで父の命令に従った¹⁷。グル＝ラームダースは、さらにアルジャンにラーホールでスィクの集会(saṅgat)を設け迎えが来るまでそこに留まるように指示した。実際、アルジャンにとって両親のもとを離れて長期滞在する、これが最初の機会であった。しかし、彼がラーホールでどのくらい滞在したか正確には

¹³ Anil Chandra Banerjee, *The Sikh Gurus and the Sikh Religions*, New Delhi : Munshiram Manoharlal, 1983, p. 110.

¹⁴ Vār 1 : 18&19, 8 : 13&16, 38 : 11. 因みにVārとは、二行詩salokに後続する連頌paurīから成るAGにおける詩形。Bhāi Gurdāsのvārは、39連から成る。

¹⁵ J.S. Grewal, *Sikh Ideology, Policy and Social Order*, New Delhi : Mahohar Publications, 1996, p. 33.

¹⁶ Mahalā 4, *Sūhī* 9, AG, p. 733.

¹⁷ Khalsa, 1997, p. 80.

分らない。もっとも伝承では約2年間であったらしい。

さらに伝承によれば、アルジャンはラーホールへ発つ前に母親の祝福を得に行った。母は、真実在の名号の憶念 (nām simaran) を常に行うよう教えた。彼女の祝福 (āsīs) は、次のようである。

〔真実在=神の〕憶念によってすべての罪障は消え失せよう、祖霊は助かるであろう。

それゆえ汝は神を常に念誦せよ、その〔神の〕最後 (=限界) はなし。

息子よ、〔これが〕母からの祝福なり。

決して忘れるでない汝の神を、世界主に常に帰依せよ。(1) (繰り返し)

真正の導師 (グル) が汝に憐れみを〔垂れんことを〕、サント (聖者) の集會を汝が好むように。

〔汝の〕服が最高神の誉れであれ、〔汝の〕飲食が日常の〔神の〕讃歌であれ。(2) 甘露を常に飲んで長生きであれ、神を憶念すれば無限の歓喜〔がある〕。

喜びに彩られ希望が満たされるように、決して心配にとらわれないように。(3) 汝の心が蜜蜂のようであれ、神の御足が蓮華のようであれ。

奴僕ナーナクは言う、それ (神の御足) に〔心を〕付けよ、

雨の滴でチャータカ¹⁸鳥が元気になるように。(4)

(Mahalā 5, *Gūjarī* 3, AG, p. 496)

第5代グルのこの自伝的な讃歌を分析すれば、つぎのような点が指摘できよう。①この元々の状況は、ビービー=バーニーが、息子アルジャンがおじサハリー・マルの息子すなわち自分のいとこの結婚式にラーホールへ出発する時に息子アルジャンに祝福を与えた、というものである。②スイクの伝承では、グル=アマルダースが孫に「神のみことばの渡し舟」(*dohita bānī kā bohita*) という異名を付けて祝福した、ということである¹⁹。アルジャンは、このことは子供であったので知らなかったであろう。彼の祖父が何を言ったか知っていたのは、彼の母親だけであったろう。この讃歌は、母親が彼に最高の期待を抱いていたことを示

¹⁸ cātriku < Skt. cātaka : the bird *Cuculus melanoleucus* (said to subsist on rain-drops).

している。それゆえ、母は彼に祝福の言葉を雨降らせたのであった。このことは、先行するグージャリー (*Gūjarī*) という讃頌から明らかであり、そこではアルジャンは最高の精神的完成の歓喜を母とともに分かち合った²⁰。③バーイー＝グルダースは、特に、グル＝ラームダースの後継者問題の時、ビービー＝バーニーはこう固く決心した。「私は、グル位がソーディー一族から離れるのは許さない。他の誰も責任の重みに耐えられないからである」²¹。

ムガル帝国のラーホール州 (*ṣūba*) は、アクバル治世下で領域が拡大し人口が増加して絶頂に達していた。首都はスーフイー (*ṣūfi*) 諸派の主要な中心地であった。アルジャンは、ラーホール滞在中にチューナー・マンディー (*Cūnā Maṇḍī*) にあるグル＝ラームダースの生誕地の改修を監督し、集会での朝暮勤行の次第を確立した。彼は、おそらく、滞在中に街のスーフイーの道場を訪れた機会を得たことであろう。ことに、彼はカーディリー (*Qādirī*) 派のシャイフ＝ミール・ムハンマド (*Shaiḥ Mir Muḥammad 1550-1635*) に会ったかも知れない。ミール・ムハンマドはシイク宗団ではミヤーン (*Miyān*) = ミールとして知られている。そうでなければ、シャリーアット (*sharī 'at* 「イスラーム法」)、タリーカット (*ṭarīqat* 「修行道程」「教団」「同行者」)、マーリファット (*ma 'rifat* 「観智」)、ハキーカット (*ḥaqīqat* 「真実」) などスーフイー道の階梯が、彼のマールー讃頌²²のなかに何故記述されているのか、われわれには説明ができまい。実際、ラーホールに滞在して、彼はさまざまな宗教の人々と接する機会を得て、宗教討論のなかで自己の考えの真実性を試すことができた。そして、同時代の世界についての認識を広め、そのことがAGの彼の作品に反映されている。さらに、ラーホールでの集会 (*saṅgat*)

¹⁹ M. A. Macauliffeは *pānī kā bohita* (「川の渡し舟」) という言葉を使って、グル＝アマルダースの祝福を次のように描いている。「わが孫は世界の海で人を渡す舟とならん」。M.A. Macauliffe, *The Sikh Religion*, Vol. III, New Delhi: S. Chand & Company Ltd., 1985., p. 1.

²⁰ Mahalā 5, *Gūjarī* 2, AG, pp. 495-6. 繰り返しの詩節の中心行はアルジャンと母との対話を提示している。

²¹ Vār 1: 47.

²² Mahalā 5, *Mārū Sohile* 12, AG, p. 1083.

によってスイク教団の急速な発展へと繋がった。こうした状況で、バーイー＝グルダースは第11番目のヴァールのなかで、アルジャンの父方のおじサハリー・マルも含めてラーホールの著名なスイクの名前を特に挙げている²³。

伝承によれば、アルジャンはしばらく経ってから、父に、精神的な含みのある言葉で心の苦しみに捌け口を与えながら、韻文の手紙を書き送った。父グル＝ラームダースは、彼をラームダースプルに呼び返しグル位を継げるか判定して、後継者であると宣誓した。このことは兄プリティー・チャンドには受け入れがたかった。ある箇所、彼は父親と激しい議論をした。このことが、次のサーラング (*Sāraṅg*) 讃頌に見られよう。

なぜ、息子よ、父と争っているのか、汝を生み育ててくれた人と争うのは罪。(1)
(繰り返し)

富を汝は誇っているが、その富は誰のものでもなし。

瞬時に偽りの楽しみは消え失せ、嘆き始める。(1)

汝の主は神、そ〔の神〕を念誦せよ。

奴僕ナーナクは汝にかく教え説く、聞けば苦熱が失せる。(2)

(Mahalā 4, *Sāraṅg* 7, AG, p. 1200)

これは、グル＝ラームダースの自伝的な讃頌である。伝承によると、プリティー・チャンドは、父がアルジャンをグルの後継者として1581年8月30日に指名したときに、父と争いを始めた。また、この讃頌は、プリティー・チャンドがグルの公庫を管理し、スイクの宮廷のさまざまな財政処理を取り仕切っていた可能性も示している。彼はグルの代理人たちと実務的な良い関係を結んでいたかも知れない。それによって彼はスイクの宮廷で相当な経済的な権力を持っていたのかも知れない。

後代の多くのスイクの物語は、長子相続という慣習法に反して末弟をグル位の後継者と決定したことを正当化するさまざまな試みであった。事実、グル＝ラームダースは従来の指名による後継者決定の原則を止め

²³ Vār 11 : 25.

(22)

て、家族相続の原則を導入した。こうして、グル＝ラームダースは末子を宗団の長に就けて、1581年9月1日、木曜日にゴーインドワールで逝去した²⁴。

グル＝アルジャンの在位25年間

この時期がグル＝アルジャンの最も有意義な時期であって、1581年9月にグル位を継承した。スィク宗団における精神的權威の移譲の合法性は、グル＝ナーナクの個人のカリスマ性に由来し、グルの職権は移譲可能なのである。マックス・ウェーバーのカリスマ性に関する所見はこの事例にあっている。

カリスマ性が儀礼によってある人から他者へ移されるという観念は、カリスマ性がある特定の個人からの分離と、それを移動可能な実体にする、ということを含んでいる。とくに、職権のカリスマ性の場合がそうであろう²⁵。

グルダラム・スィング・カールサーは次のように述べている。「後継者を指名したとき、グル＝ナーナクはグルの權威の認可によってグル＝アングド (Anḡad) の周囲に合法性の雰囲気をつくった。グル＝ナーナクの弟子は、任命によってグルになったのである」²⁶。この過程は、最初の三代のグルまで続いた。実際、スィク宗団の主流は、グル＝ナーナクの精神的權威を委託されたものとしてグルたちの合法的な流れをつねに容認してきた。同時に、グルたちの年長の息子たちは、長子相続という慣習法に訴えてグル位の相続権を主張し、初期のスィク宗団に内紛を起こしていた。

グル＝アルジャンは、継承の儀礼とは別に、父や母方の祖父に帰属す

²⁴ *sambat 1638 vārāḡhe maha bhādaun sudi titiā 3 vīravāra kai dīni Guru Rāmādāsa samānā*. Guru Nanak Dev University MS. 1245, folio 1255a. Annotated by Pashuara Singh : 2006, p. 100, note 37.

²⁵ Max Weber, *On Charisma and Institution Building*, Chicago : The University Chicago Press, 1968, p. 54, 57.

²⁶ Khalsa, 1997, p. 34.

る、多量の聖句を手写本 (*pothi*) という形で継承した。彼は、先代たちが保存してきたものの中に貴重な無尽蔵の宝物を見いだして人々の称讃に包まれた。「父、祖父の宝を開けて見ると、私の心は幸せになった」²⁷。

グル＝アルジャンの在位の当初は、父を後継する権利に挑んだ長兄の公然たる反目によって特徴付けられる。プリティー・チャンドがスイクの巡礼者たちからの供物を受け取るために、幾人かの代理人たちの支援を受けてラームダースプルの周囲に包囲網を設け、そのことが宗団内に派閥主義の種を撒いたことは驚きではない²⁸。

皮肉にも、この派閥主義が、宗団内の創造的発展の背後で主要な起動力となった。グル＝アルジャンにとって、和解と競争の両方の将来の道を決める決定的な時期であった。自分の地位を確固たるものにするために彼が執った第一歩は、謙虚さを詠う詩歌に人々の関心を集めることであった。AGのなかの彼の讃歌は、最高の謙虚さの精神を注ぐものであり、彼を誹謗する人々への最強の武器となった²⁹。第二の方法は、正統派を支持する人々の忠誠心を頼りに、プリティー・チャンドの支持者たちからの挑戦に対する抵抗が功を奏したことである³⁰。特に、スイク編年史は、バーイー＝グルダースが果たした役割を強調しており、彼は敵の行動に対処するためにアグラから帰還したのであった³¹。プリティー・チャンドは、おそらく、ラーホールのムガル行政官に近づき援助を頼んだが、ラームダースプルの収益の取り分に満足せざるを得なかったので

²⁷ Mahalā 5, *Gaurī* 31, AG, p. 185-6.

²⁸ Teja Singh and Chanda Singh, *A Short History of the Sikhs*, Vol.1, Patiala : Punjab University, 1989 (revised ed.), p. 25.

²⁹ Mahalā 5, *Sorathi* 80, AG, p. 628.

garībī gadā hamārī || khannā sagala renu charī ||

謙虚さが私の棍棒、すべての人の足の塵が、[私の] 短剣。

isu āgai ko na ṭikai vekārī ||

この前に敵わない、悪事をなす者は。

³⁰ W.H. McLeod, *Exploring Sikhism : Aspects of Sikh Identity, Culture and Thought*, New Delhi : Oxford University press, 2000, p. 55.

³¹ Teja Singh and Chanda Singh, 1989, p. 25.

あろう。

しかしながら、歴史家がこれまで行って来たように、プリティー・チャンドの敵対の原因をグル＝アルジャンの永遠の未来として解釈することに、きわめて慎重でなければならない。事実、二人の兄弟間で調停のようなことがある時点で行われ、それは、おそらくグル＝ナーナクの時代から尊崇を受けていたバーイー＝グルダースの努力によるものであったろう。実際、グル＝アルジャンはラームダースプルの居住地の資産からの収入を譲渡し、敬虔な信者からの善意の供物は宗団の台所の維持と他の事業のために確保した。彼は、教えの中で他者への敵意を完全になくし、人々への嫌悪と嫉妬の感情を抱かないようにいつも用心するように強調している³²。彼は、スィクたちに悪意に悪意で応酬することなく、善意で応酬することを説いた。これが、敵になってしまった人々に打ち勝つ唯一の方法であった。

自分たちを傷つける者たちは、おうおうにして自分たちに最も近い人たちである場合が多い。プリティー・チャンドが病氣したとき、グル＝アルジャンが兄の快復を祈願していることは興味深い³³。兄が快復したとき、グルはAkāl Purakh (Skt. akāla puruṣa 「永遠のプルシャ (=神)) にビラーワル (*Bilāval*) 讃頌のなかで感謝を詠っている³⁴。

グル＝アルジャンは、父が開始したアムリットサル、サントークサル (Santokhsar) そしてラームサル (Rāmsar) での聖池の完成など、ラームダースプルでの新事業という父の遺産を拡大した。後代まで影響を及ぼした出来事が1589年に起きた。グル＝アルジャンがアムリットサルの

³² Mahalā 5, *Kānarā* 8, AG, p. 1299.

³³ Mahalā 5, *Soraṭhi* 42, AG, p. 619.

³⁴ Mahalā 5, *Bilāvalu* 77, AG, p. 819.

rogu miṭāī āpi prabhi upajīā sukhu sānti || vaḍa pratāpu acaraja rūpu hari kīnhi dāti || 1 ||

病を消した、神自ら、喜びと平安が生じた。大いなる栄光と驚きの姿を、神は与えた。

guri govindī kripā karī rākhiā merā bhāi ||

グル・ゴヴィンド (神) が恩寵を垂れ、私の兄を救った。

hama tisa kī saraṇāgatī jo sadā sahāi || 1 || rahāu ||

私は永遠の支えであるその者に帰依する。(1) (繰り返し)

中央に建設されるHarmandir Sāhib（「神の寺」）の定礎式を行ったのである。

建設事業は、巨大な企画で膨大な資金の動員が必要であった。このために、グル＝アルジャンは、スイクの家庭に生産物の10分の1を中央の宝庫（*Guru dī golak*）に寄進することを勧めて、10分の1（*dasvand*）の喜捨（*dān*）を制度化した。彼は、この10分の1の喜捨と、ブハーラー（*Bukhārā*）、カブール（*Kābul*）、ラーホール、スィルヒンド（*Sirhind*）、ターネーサル（*Thānesar*）、デリー、アーグラ（*Āgrā*）、バナラス（*Banāras*）、アラーハーバード（*Allhāhābād*）、パトナー（*Paṭnā*）そしてベンガルなど中央アジアと東インドを繋ぐ交易路に位置する街に住む貴族のスイクたちからの他の供物を勧進するために代理人（*Masand*）制度を再組織した。パンジャープ中央地方を除いて、スイクの集会場がラージャスターン（*Rājasthān*）、マールワー（*Mālva*）、グジャラート（*Gujarāt*）、グワーリヤル（*Gvāliyar*）、ウッジャイン（*Ujjain*）そしてブルハンプル（*Burhānpur*）に出来ていた。南インドの沿岸地帯や北インドのカシミール地方にもスイク居住区があった。多くの場合、これらの街のスイクの商業コミュニティは、神の賜物への感謝の念でスイクの宮殿に経済的支援を行っていた。この支援は、年に2回、バイサーキー（*Baisākhi*）とディワリー（*Divālī*）の祭礼の日にグルに拝謁する代理人を通して送られた。いっぽう、パンジャープの農民たちは、建設現場で慈善奉仕した。こうして、ラームダースプルの街は発展の勢いに乗り、さまざまな階層や職業の人々が定住するようになった。

グル＝アルジャンは、アムリットサルの建設事業を完成すると、近隣の農村地帯を旅して、新しいスイクの集会場を設けた。この旅で、彼は光景の美しい村に魅せられて、村の所有者からその土地を獲得し、1590年に新しい街タルン・ターラン（*Tarn Tāran*）を造営した。この街は、その後、スイクの重要な巡礼地となった。パンジャープ中央地方を越えて自分の影響力を広めていたグル＝アルジャンは、ビヤース（*Biās*）川とサトラジ（*Satlaj*）川の両河地帯のジャーランダル・ドアープ（*Doāb*）地方の、シェール・シャー・スーリ（*Sher Shāh Sūri*）街道（*mārg*）に沿った場所に、新しい街カルタールプル（*Kartārpur*「創造者の街」）を造営した。定礎は1594年で、そこへの定住は祝賀で迎えられた。

完全なる主を憶念し憶念して、たくさんの仕事ができる。

カルターブルに創造主が住む、サントたちの側に。(1) (繰り返し)
いかなる障碍もない、グルに祈願すれば。ゴービンド・ラーイ (神) は、帰依者の富の守護者。(2)

[その] 価値は減じることなく、倉は [つねに] 満杯。

蓮華の如き御足は [帰依者の] 心と身体に住すも、主は近座しがたく、無限なり。(3)

[この街に] 住み稼ぐ者はみな幸せで、いかなる欠乏も見えない。

サントの恩寵で、完全なる主・世界主に会えた。(4)

歓呼の声をみながあげ、真実の場所 (聖地) はいと美しい。

ナーナク [曰く]、福楽の宝庫である [神の] 名号を念誦して、完璧なるグルを得た。

(Mahalā 5, *Bilāval* 63, AG, pp. 816-7.)

1595年6月19日、グル＝アルジャンに、妻ガンガー・デーヴィーとの間に一人息子が、アムリットサル近郊の村ワダーリー (Vaḍālī) で生まれ、ハルゴービンド (Hargobind) と名付けた。アルジャンは、子供の誕生を祝って次の讃頌を詠んでいる。

正師が本当に子供を授けてくれた、長寿なるものが天意によって生まれた。

[母の] 胎内に来て住み始めた、母の心に嬉しさが広がった。(1)

息子が生まれた、ゴービンド (神) の帰依者が。予め記された天意がみなに証された。(繰り返し)

第10月に、[神の] 教令によって男子が生まれた。哀しみが消え、大きな喜びが生じた。

同胞が喜んでグルのことば (gurbānī) を歌う。かくて、正師の心は大いに喜ぶ。(2)

[私の] 蔓草が伸び、幾世代にも続く。正法の力を神は堅固にした。

[私の] 所願を正師が授けてくれた。安心して [神に] 専念した。(3)

子供が父をととも尊敬するように、[私は] グルのお気に召すように、呼ばれたら話す。

隠された秘密のことではない。グル＝ナーナクは喜んで、恵んで下さった。(4)

(Mahalā 5, *Āsā* 101, AG, p.396)

アルジャンは、息子の誕生を祝してハルゴービンド街を造った。ハルゴービンドの誕生は、結婚後15年も子宝に恵まれなかった家族にとって、後継者の不安をなくした。プリティー・チャンドと妻カルモー (Karmo) は、すでに第5代グルの後継者として息子ミハルワーン (Miharvān) に期待を寄せていた。彼らは、直系の後継者がいなければ、当然、自分たちの息子に継承権が回ってくると言い聞かされていた。しかし、ハルゴービンドの登場によって、彼らの夢はつい失せた。かくして、彼らにはハルゴービンドがいなくなるのが肝心なこととなり、この邪悪な対象のために決して用心深いとは言えない方法をとった。グル=アルジャンは、ハルゴービンドの守り役としてバラモンを雇っていたが、そのバラモンがプリティー・チャンドの指令でハルゴービンドに毒を盛ったが失敗した。

毒は胡麻粒ほども効かなかった。邪悪なバラモンは苦しんで死んだ。(1)

至高なる神は、神の民を自ら護った。罪人は死んだ、グルの力によって。(1)

(繰り返し)

主の民は、主を瞑想した。愚かな罪人をかれ(神)は破った。(2)

主は父母、民の守護者。中傷誹謗する者の顔はここでも、あそこでも黒色。(3)

奴僕ナーナクの祈りを、最高神は聞き入れた。卑劣な罪人は絶望して死んだ。(4)

(Mahalā 5, *Bhairau* 9, AG, pp.1137-8.)

1598年11月4日、ムガル皇帝アクバルは、グル=アルジャンの求めに応じてゴーインドワールを訪ねた。そこで、彼はスィク会衆の讃歌詠唱を聴き、バーバー=ナーナクが作詩した神に関する知識を述べるヒンディー語の讃歌の詠唱に深く感動した。スィクの厚遇に対する礼儀として、アクバルと随行員たちはグルの共同体の台所ランガル (*langar*) で一緒に食事をした。皇帝は、グル=アルジャンの精神的な無尽蔵の愛情と、スィクたちの無私な奉仕にたいへん満悦した。グルの要請に応じて、皇帝は不順なモンスーンの被害を受けた、その土地の農民の年貢を免除した。このアクバルの訪問は、偶然ではなく公式なものであった³⁵。1575年、ファターヘブル・スィークリーに造った「礼拝の家」から開始したアクバルの宗教的多元主義は、この訪問によってある程度先鋭化さ

れたに違いない。

1599年初めに、グル＝アルジャンはより創造的な仕事に集中するようになった。この頃までに、彼はさまざまな主題を扱う短い讃頌をほとんど作っていた。それが、ラームサルのだよかな雰囲気の中で作った『スクマニー』だった。この段階で、AGの編纂事業は開始していた。スィク教聖典の形成過程は、伝承から推測できるよりもっと複雑な過程を含んでいた。特に、伝統的に引用され広まっていた偽本の存在が、AG編纂の基本的要因であったとは思われない。グル＝アルジャンは、基本的には、彼の時代における教義的、制度的な伸展というより大きな時代状況のなかに起きていたスィク宗団の強化過程に対応して、真正性のある聖典を用意したのであった。別の要因はアクバル治世の文化的状況であり、宗教集団の教理確定化として聖典の提示を必要としていた。最初の版『アーディ・ビール』(Ādi Bīr)は、儀礼的に1604年8月16日、アムリットサルに新しく造営されたダルバール・サーヒブに奉安され、スィク教の中心地における新たなスィク教の儀礼の開始を告げるものであった。

アクバル治世における宗教的多元主義は、スィク宗団の平和的な発展によい環境を与えた。しかし、アクバルの寛大な政策がグル＝アルジャンと信奉者たちに庇護を与えたとするならば、それはグルの敵対者たちの不埒な目論見を取り去ることはできなかった。1605年10月、アクバルの死の8ヵ月内に、グル＝アルジャンは新帝ジャハーンギール(Jahāngīr)の勅命により1606年5月30日、金曜日に処刑されたのであった³⁵。これが最も活動的なグルの生涯の最後であり、その死はスィク宗団によって最高の犠牲と受け取られた。グル＝アルジャンの殉死は、間違いなく、スィク宗団史のなかで非常に重要なものであり、根本的なレベルでスィク宗団の自意識、分離主義そして闘争性の進展の一因となっている。また、このことが、スィク宗団の結晶化の唯一最も決定的な要

³⁵ J. S. Grewal and Irfan Habib (eds.), *Sikh History from Persian Sources*, New Delhi : Tulika Books, 2001, p. 93.

³⁶ Nanak Dev University MS. 1245, folio 1255a. Annotated by Pashuara Singh : 2006, p. 102, note 69.

因となった。事実、このおぞましい処刑は、アクバルの宗教的多元主義の政策の最後の前兆となっただけではなく、ムガルのインドにおける宗教的・文化的風景の変容の開始を告げるものでもあった。

おわりに

本稿は、グル＝アルジャンの伝記的素描を、その生涯を分析することによって再構築しようとしてきた。とくに、彼の生涯をそれぞれ特徴のある三つの時期に分けて分析することにした。第一は、彼の個人的な経験に由来する、AG所収の自伝的な讃頌を慎重に検討した。第二に、パンジャブの文化的脈絡のなかに得られた証拠を位置づけてみた。第三に、同時代のムガル史における出来事から生きた資料としての記録を追って、グル＝アルジャンの時代の権力関係の動態を理解しようと努めた。これらの三つの方法を組み合わせて、断片的な資料から一貫した意味のある物語を作るために、解釈の枠組みを作って、グル＝アルジャンの生涯の素描を試みた。

(追記) 前稿において『アーディ・グラント』の略記をADと誤記した箇所があるが、すべてAGと訂正する。